

A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

1 学校教育目標 徳・知・体のバランスのとれた質の高い桜っ子の育成 —桜岡「や」「か」「た」づくり—	2 本年度の重点目標 ① 学力の向上 ② 生徒指導の充実 ③ 体力向上の取り組み ④ 教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施 ⑤ 特別支援教育の充実
---	--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を 含む

3 目標・評価								学校関係者評価委員会から	
① 学力の向上								学校関係者評価委員の 評価(A~Dで記入)	意見や提言など
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策		
教育活動	● 学力の向上	分かる授業への改善を行ったか。	・一時間の授業の流れが分かるようにする。 ・考えを表現し、伝え合う場を工夫する。 ・補充学習の場の設定をする。	・これまでの研究で培った桜岡スタイルの流れに沿って授業をしたり、授業ですること をホワイトボードに示したりする。 ・交流の場を国語科にも生かす。 ・給食準備中の補充指導「はらぺこ算数」の場を作り、個別に支援できる体制をつくる。	B	・「桜岡スタイル」を全職員で共通理解し、校内研究においては昨年度までの交流の形式を、国語科の学習で取り入れ、交流する場(対話活動)を取り入れた授業実践に取り組むことができた。 ・各学年で特設タイム「すいすいタイム」、「桜っ子タイム」の年間指導計画の見直しを行い、「書くこと」に特化した「すいすいタイム」を全学年で共通して取り組み、計画的に実施することができた。 ・全学年部で国語科の研究授業を行い、全職員で研究に取り組むことができた。 ・給食の準備時間を使った「はらぺこ算数」では、基礎計算の補充や宿題やプリントの書き直しなど、個別指導の充実を図ることができた。	・昨年度まで7年間の校内研究で積み上げてきた算数科授業づくり「桜岡スタイル」で授業実践を継続して行っていく。また「桜岡スタイル」を他の教科の授業でも取り入れる。 ・授業に生きる特設タイムの内容や運営を考え、実践していく。 ・個別に支援の必要な児童に対して、今後も「はらぺこ算数」等で補充指導を継続していきたい。	B	○話を聞くことは上手にできるように思います。 ○読み聞かせで学校に伺い、上手に聞いてくれます。 ○書くことはいいなあと思います。難しいがよく考えていると思います。
教育活動	● 学力の向上	児童の基本的な学習習慣は育成できたか	・「背・目・手」(背筋を伸ばし、相手の目を見て、手まぜをしない)を意識した学習態度を85%以上の児童が身に付くようにする。	・授業中、児童に声をかけるなどし、「背・目・手」を意識させて学習に臨ませる。 ・ノートの書き方を具体的に指導する。 ・休み時間の合い言葉「か・つ・お」、ふではこの中身について職員間で共通理解し、学習規律の確立を徹底していく。	B	・話を聞く心構えとして「背・目・手」は1年生の児童にとっても意識づけがしっかりできている。集会等でも、効果はありよく身につけている。 ・学習においても「背・目・手」に始まり「背・目・手」で終わるようにしているが、徹底できていない場面が見られる。 ・ノートへの学習の記録は教科ごとに形式を統一見通しを持たせて進められている。 ・次の学習の準備を含む休み時間の合い言葉「か・つ・お」については声をかけるとほぼできている。	・「背・目・手」が少し形骸化しつつあるので、「背」「目」「手」の意味付けやできていない姿に気付かせる必要がある。新年度スタート時に、教職員間でも共通理解を図り、一貫した指導を行えるようにする。 ・学習習慣や規律について支援を要する児童がいる。わずかな成長へも称賛の声かけを大切に、子どもサポーターと連携を図って一貫した対応で根気強く取り組んでいく。 ・次の学習の準備については、終わりのあいさつの時に児童が「次の学習の準備をして…」の声かけを行うなど、子どもたちにも呼びかけ(係より日直がよい)させることで意識付けを高め、定着を図る。	B	○漢字の検定テストがとて もいいと思います。 ○興味を持つように考慮して授業を行うことは、今の年代の子供には本当に必要だと思われます。また、家庭との連携は、これから必要となると、個々が向上するためには必須のことと思われ れます。
教育活動	● 学力の向上	家庭学習の充実を果たせたか。	・「低学年は30分、中学年は45分、「高学年は60分以上家庭学習」を行う児童を80%以上にする。	・「家庭生活・学習カード」を活用し、家庭と連携しながら家庭学習の充実を図ることができた。 ・「家庭学習の手引き」を全家庭に配布し活用を呼び掛ける。 ・自習学習の手引きを3年以上の児童に配布し、自習学習に取り組ませ、週2回ノートを提出させる。	B	・全児童に毎日「家庭生活・学習カード」を書かせることで、学校と家庭での生活や学習を振り返らせたり、その振り返りを家庭と共有したりすることで、家庭学習の充実を図ることができた。 ・年度当初に「家庭学習の手引き」を全家庭に配布し、家庭学習のやり方や目標時間を知らせ、共通理解を促すことができた。 ・3年生以上に週2回の自主学習を取り組ませた。自学名人として紹介をすることで、学習内容の向上が見られるようになったが、まだまだ個人差がある。	・「家庭生活・学習カード」を活用し、家庭と連携しながら家庭学習の充実を継続する。 ・「家庭学習の手引き」の全家庭への配布を継続する。 ・自学名人の紹介を継続し、自主学習の内容の向上を図る。	B	
② 生徒指導の充実								学校関係者評価委員会から	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員の 評価(A~Dで記入)	意見や提言など
学校運営	● 心の教育	子どもの支援体制づくりとケース会議の充実を図れたか。	・保護者から相談しやすいと思われる認知度を80%以上にする。 ・不登校児への対応を図る。	・気になることを、家庭と連絡しあうよう努める。 ・児童支援ケース会議を充実させる。 ・見守りたい子の共通理解を図る。(年4回見守りたい子の連絡会と毎月の生徒指導会) ・相談体制の充実を図る。 ・欠席者報告票による児童の状況を把握する。 ・毎月1回の生活指導会を実施する。 ・スクールカウンセラーとの連携を図る。	B	・見守りたい子の連絡会と毎月の生徒指導会で不登校傾向にある児童・不登校傾向になった児童に対する情報交換ができた。支援会議とあわせ、担任が1人で抱え込まないような体制作りができた。また、学校だけでなく、外部機関(SSW・SSF)やスクールカウンセラーの協力を得て、児童に対する共通理解を進めることができた。 ・不登校傾向にある児童の状況改善はあまりできなかった。またスクールカウンセリングに関する保護者への啓発があまりできなかった。	・不登校傾向の児童に対する支援会議を今年度同様開催したい。 ・外部機関との連携および専門機関など、それぞれの関係機関との連携をより密にする必要がある。 ・スクールカウンセラーと児童だけでなく、保護者も結びつけるための計画的な呼びかけが必要である。	B	○4、5年前に比べて、朝、道で会ってもあいさつをする子供が少なくなった気がします。 ○学校の取り組みとしてカードを渡したり、ハイタッチ運動を広め活性化を図っている動き、よい取り組みだなと思いました。 ○あいさつは、校外では、よくしてくれます。 ○校外でもあいさつは、なかなかできないようです。でも、声をかけると返してくれます。(うちの子も大きな声ではしていないように思います。) ○笑顔のあいさつも返事ととらえてもいいと思います。 ○家の前が通学路で、以前より、あいさつしてくれる子供が多くなったように思います。 ○こちらからあいさつすると、元気に応えてくれます。 ○不登校と思える子供さんの対応はどのようにしたらよいか悩んでいるところもあります。 ○車が止まった時の会釈も大切であることを子供たちに伝えてほしい。
教育活動	● 心の教育	笑顔であいさつを行ったか。	・進んで、元気に、笑顔であいさつする子を80%以上にする。	・毎週火曜日の「あいさつ運動」に自主性を持たせるように工夫する。 ・教師が率先して、元気なあいさつを行う。 ・「親子でめざそう! 朝のあいさつ」をPTAと共に具体的に取り組む。	C	・火曜日のクラスごとのあいさつ運動に元気に取り組むことができた。 ・あいさつ名人を放送したりあいさつの木にシールを貼らせたりしたことで、あいさつをしようという意欲をもたせることができた。 ・児童会でもあいさつを呼びかけているが、継続して元気にあいさつする児童を増やすことはできなかった。 ・PTAと協力して朝のあいさつには取り組むことができなかった。	・「あいさつ運動」では、友だちと一緒にあいさつ元気にできる児童が多い。しかし一人だと、小さい声になる、あいさつを進んでしない児童も少なくないように思われる。今後も教師が率先して元気にあいさつを行い、あいさつが進んで飛び交うようにする取り組みを工夫していく必要がある。 ・「あいさつ」の教師や保護者の評価平均は児童の評価平均より低い。特に進んでのあいさつに課題があると考え、保護者と共にあいさつ運動に取り組むなど、具体的な方法を考えていくことも必要である。	B	
学校運営	● いじめ問題への対応	いじめに教職員一体となった対応ができたか。	・いじめに一人に対処することなく、教職員が協力して課題解決にあたる。	・学年グループ、生徒指導部、教育相談部が中心となって、複数の目で児童理解に努め、いじめの防止・対応にあたる。	A	・いじめにつながるような言動に気づいたり、見かけたりした場合、担任・学年だけでなく、教育相談担当、特別支援教育コーディネーター、生徒指導担当、スクールカウンセラー、教務、教頭、校長が「早く」「正確に」情報共有できるように、まずは、口頭で報告し、必要に応じて文書で回覧した。チームによる早期の取り組みで、いじめの深刻化防止に努めることができた。	・いじめは学校全体で取り組むべき最大課題であるという共通認識をもち、早期発見に努め、その上で、児童の個別指導や学級指導などに細心の注意のもと取り組んでいく。	A	
教育活動	● いじめ問題への対応	いじめの早期発見と早期対応はできたか。	・いじめを早期に発見し、早期に対応することにより深刻化を防ぐ。	・「いじめ0宣言」を児童会と共に行う。 ・年間6回の「すっきりここにアンケート」を行い、いじめの早期発見に努める。 ・毎月10日に「心を考える日」の取り組みを行う。	A	・「いじめ0宣言」を児童が校内放送で読み上げることで、友だちを大切にしていじめを許さない、という意識を育ててきた。 ・年間6回の「すっきりここにアンケート」を実施した。気になる児童に対しては早めに相談や支援をして、早期解決にあたった。 ・毎月10日に「心を考える日」として、人権教育の充実を図ってきた。 ・以上の様々な取り組みにより、大きな事案に発展することなく、児童は安心・安全な生活を送ることができた。	・引き続き、全体指導や個別対応でいじめの防止、早期発見に努め、細心の注意を払っていききたい。 ・職員間の情報交換を密にすると共に、職員の資質の向上を図るため、児童理解やいじめに関して詳しい方を講師として招聘し、職員研修を実施したい。	A	○重要なことだと思われ ます。継続して、積極的に指導して下さるようお願いしま す。

③ 体力向上の取り組み								学校関係者評価委員会から	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員 の評価(A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	● 健康・体づくり	外遊びの奨励と体育の充実を図り、体力は向上したか。	・外遊びの奨励と体育活動の充実で体力の向上を図る。 ・新体力テストを計画的に実施し、6年間を通じた体力向上に取り組む。	・わくわくタイムでの共遊(異学年交流)。 ・学級で「みんなで遊ぼう」の取組を積極的に取り入れる。 ・マラソン週間、長縄とび大会の実施。 ・実態把握によって、特に落ち込んでいる分野の向上を図る取り組みを行うとともに、6年間を見通した「体づくり運動」に計画的に取り組む。	B	・低学年はよく中庭で遊んでいる。中学年・高学年は運動場、遊具、一輪車など様々な遊びを行っている。 ・マラソン週間、長縄跳び大会を実施し、寒い時期の体力作りに取り組むことができた。 ・計画的にわくわくタイムを実施し、外で遊ぶ機会を増やした。 ・共有フォルダを活用し、学習カードの共有を図った。	・体力テストの結果をもとに各学級で落ち込みが大きい分野の向上を図るような取り組みを計画的に取り入れる。 ・体力向上のために、スポーツチャレンジを活用し、運動委員会が説明をするなど、児童の意欲が高まるような工夫をして、取り組みをすすめる。 ・引き続き、マラソン週間、長縄跳び大会を設定し、冬場の体力作りを努める。 ・今年度作成した体育カードを校内フォルダに整理して残し、次年度に効果的に活用できるようにする。	B	○朝食は必ず食べるように指導していただきたい。 ○完食はどうだろうか。やはり押し付けるのは問題だと思います。本当にきらいになってしまうのが心配です。 ○給食時間が過ぎても子供を残してまで食べさせていないと聞いたが、飽食の時代でもあり、それでよいのではと思います。 ○クラスの分はみんなで食べようとしている学校の取り組みはよいと思います。
教育活動	● 健康・体づくり	食育指導を通して望ましい食習慣の形成ができたか。	・保健便りや家庭科の授業や学級指導での食育指導を通し、食に関する啓発・指導を行い、朝食の摂取率を90%以上にする。 ・給食週間の際は、児童の給食委員会の発表でも「食の重要性と意義」について全校児童に啓発するための発表の機会を持ち、意識付けを高め、給食完食率を90%以上にする。 ・歯科保健指導を計画的に実施する。	・生活点検表を確認し、朝食を摂らない事が多い児童に声をかけ、個人面談や家庭訪問の際に保護者にも理解を求める様に教師からの働きかけを行う。 ・家庭科の学習を通し、朝食の意義について児童自身の意識を高め、よりよい食生活について考え実践する機会をとる。 ・完食コンクールを各学期に1回ずつ行い、給食完食への意欲づけを行う。 ・「歯を守る会」を活用し、歯科校医と協力し、児童の歯の健康に対する知識の向上や適切な歯みがきの仕方習得できるように取り組む。	B	・1学期に朝食実態調査を行い、その結果に基づいて学級指導を行った。保護者からのコメントももらい、家庭での意識付けを行った。 ・毎学期に完食コンクール(残食ゼロ週間)を行えなかった。完食コンクールでは、普段食べていない子どもが頑張って食べることができた。 ・また、コンクール以降も完食を意識して食べることができた。 ・生産者や調理者に対する感謝の気持ちを手紙を書いて伝えることができた。食を大切にすることを引き続き指導していく。 ・食育指導と合わせて、歯磨き指導も行う。	・完食コンクール(残食ゼロ週間)を学期に1回行えるようにする。 ・完食に合わせて、食の大切さを伝えたり、生産者への感謝の気持ちをもたたりすることも行う。 ・歯磨き指導を年に1回は行う。歯ブラシコップの保管方法について、学級ごとに違うので、衛生面も考慮して保管方法を改善する。	B	

④ 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施								学校関係者評価委員会から	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策	学校関係者評価委員 の評価(A～Dで記入)	意見や提言など
教育活動	◎ 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	教職員のICTを活用した実践力が向上したか。	・電子黒板を活用した授業ができる教職員の割合を100%にする。	・全教職員が参加する校内研修会を通じて、実践力の向上を図る。 ・先進的な取り組みを紹介し、自己研鑽の資料として活用する。 ・自作教材を共有し、教材研究の時間を削減する。	A	・夏休みに全職員参加のICT研修を行った。基礎と応用のコースを設け、職員の能力と需要に応じた研修を行い教職員のICT利活用能力の向上を図った。 ・これまで教職員が自作した教材や学習に役立つ資料などを使ったり共有したりして、授業、集会に活用することができた。 ・ほとんどの教職員は電子黒板を活用して授業ができている。	・ICT研修の時に、より効果的な利活用方法について学び、実践力を高める。 ・教職員間の活用力の差を縮めるため、日頃から学年グループでの実践の共有を図る。 ・先進地・先進校の実践発表などを紹介し、学習指導に生かすことができるようにしていく。 ・著作権に関する知識を増やし、情報活用力アップを図る。	A	○学校内でできていることなので評議委員にはわかりづらいところです。 ○プログラミング教育が入ってくると聞きましたが、子どもたちはついていけるのだろうか、大人には難しく感じています。先生たちも大変ですけど、よろしく願います。 ○保護者の関心が薄いのが心配です。ネット犯罪等が心配されます。しかし、時代の流れについていくのが大変ですね。 ○インターネット環境への大人の対応が急務と思われる。
教育活動	◎ 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	児童の情報活用能力が高まったか。	・ICT機器を用いて、調べ活動をしたり、情報を発信したりする能力を高める。	・インターネットでの調べ活動を、いろいろな教科の中で取り入れ、情報モラルにも触れる。 ・電子黒板を使って発表させたり、教材を活用させたりして能力を高める。	B	・国語では、児童が電子黒板を用いて自分や友だちの考え方を発表したり、話し合ったりする活動ができた。 ・タブレットPCを用いた授業を中・高学年で定期的に行うことができた。総合的な学習を中心とした問題解決学習や、体育の個人技能向上のための練習や国語のローマ字学習でもタブレットPCを使用し、楽しみながら学習することができた。	・学年ごとにタブレットPCの技能に対する到達目標を定め、系統的にICT機器の操作能力を高める。それにより学年が上がるに伴って技能の活用レベルを効率的に高めることができる。また指導もしやすくなる。 ・情報モラルの必要性が高まっており、学校全体での継続的・系統的な指導により、情報の真偽を判断する力をつけさせる。 ・保護者の情報モラルに対する意識を高めることが児童の意識にもつながるので、保護者への啓発機会を増やしていく。	B	

⑤ 特別支援教育の充実								学校関係者評価委員会から	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策	学校関係者評価委員 の評価(A～Dで記入)	意見や提言など
学校運営	○ 特別支援教育の充実	教職員の知識・理解を深め、具体的な支援の在り方が理解できたか。	・校内研修会で特別支援教育について具体的な支援についての研修を行う。日常の教育的な支援に生かす。	・校内研修会を通じて教職員の知識・理解を深め、実践に生かせる内容の研修を行う。 ・障害のある児童の学校生活支援のための巡回相談員及び専門家を活用し、支援を必要とする児童に対して、合理的な配慮を行う。	A	・特別支援に関する校内研修会を設け、困り感のある児童への接し方や効果的な支援の在り方について外部での研修会の報告会を行うことができた。 ・児童の実態に応じて、巡回相談や専門家に相談に行くなど方策をとった。担当が一人で問題を抱え込まないよう、児童の将来を見据えた有効な手立て等について関係機関との連携を図ることができた。これらの取り組みを、今後も継続していくことが必要である。	・校内研修会を実施し、教職員の知識・理解を深める。また、学年グループなど小集団で支援の方法についての研修を行う。 ・障害のある児童の学校生活支援のための巡回相談員及び専門家や医療機関、また、小城市子ども支援センターと連携し、相談体制を維持する。	A	○特別支援学級が多くなっていると思います。対応がきめ細やかになるり、保護者としては安心されると思いますが、学校は教室が足らなくなっているのが心配されます。 ○児童数が増えているのは桜岡小だけでは？ ○特別支援教育は、根気のいることであり、今後も末永く継続していく必要があると思われます。
教育活動	○ 特別支援教育の充実	「個別の指導計画」及び「個別の教育支援計画」を作成・更新したか。	・支援が必要な児童に対して、「個別の指導計画」及び「個別の教育支援計画」を作成・更新し、効果的な活用を行う。	・支援が必要な全ての児童の「個別の指導計画」及び「個別の教育支援計画」を計画的に作成・更新する。	A	・特別支援学級に在籍する個別の支援を必要とする児童には、個別指導計画・支援計画を作成し、学期毎に目標を立てて評価を行ってきた。通常学級に在籍する「見守りたい児童」に対しても、実態・課題・対応策についてまとめた。達成できたことや次の学期の課題については、個人懇談の際に共通理解することができた。	・今後も必ず、特別な支援が必要な全児童に、個別の指導計画及び教育支援計画を計画的に作成する。学年末には、次年度へ向けて成果と課題を共通理解する時間を設ける。	A	

⑥ 業務改善・教職員の働き方改善の推進								学校関係者評価委員会から	
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策	学校関係者評価委員 の評価(A～Dで記入)	意見や提言など
学校運営	● 業務改善・教職員の働き方改善の推進	業務改善による超過勤務縮減に向けた取組ができたか。	・校務の整理や役割分担の明確化、行事の精選等に取り組む。	・各分掌の役割や人数構成などを見直したり、双方の整合性を図ったりして、現在の学校の現状にマッチした取組を考えながら、校務全体を見直す。 ・学校行事等の見直しを推進する。	B	・「働き方改革」の意識付けを行うため、職員会議や連絡会等で具体的な数値目標を伝え取り組むことができた。役割や人数構成については仕事分野の見直し、小城市全体が進んでいない。限られた人数に対して重複して担当しなければならず、整合性を図ることがなかなか進まない。 ・プロジェクト会議において学校行事等の見直しを進めている。	・「働き方改革」の意識付けとともに、仕事の内容の見直しが必要である。毎日、授業に追われ16:00過ぎに事務的仕事に就ける。そして16:45には退勤時刻になる。そのわずかな時間で事務的処理や校務分掌をこなさなければならぬ。校内努力として「働き方改革」を推進するとともに、小城市全体での仕事分野の精選が必要である。	B	○教育は時間をかけなければならないと思います。 ○働き方改革ということで、長時間勤務をなくさなければならないと思いますが、やるべきことはたくさんあると思いますので難しく感じます。 ○ICTが進んで、自宅でもできるというが、それ自身が矛盾していると感じます。 ○学校の対策の一つとして金曜日を定時退勤日にしているの聞き、対策を考えてあることがわかりました。
学校運営	● 業務改善・教職員の働き方改善の推進	教職員の意識改革を図る取組ができたか。	・効率的な業務遂行を工夫。 ・各担当業務の情報共有を強化。	・業務記録を基に、それぞれの業務時間を把握し、効果的な業務遂行に努める。 ・業務上のコミュニケーションを大事にし、それぞれの業務の進捗等の情報を共有し、教職員間フォロー体制を強化する。	A	・毎月の業務記録を記入し、提出できた。それをグラフ化や平均化し、職員全体に把握してもらうことができた。それぞれの超過勤務時間の合計を棒グラフに表し、個人個人の位置を確認させたり、1日の超過勤務時間を30分ほど短縮し、平均2時間以内にする具体的な目標を立て、取り組んできた。 ・高機能印刷機や新型裁断機の導入により、日々の印刷業務が簡素化・効率化し職員の業務負担軽減につながった。	・業務上のコミュニケーションをもっといかに進めたいと感じた。特に、今年度赴任した職員等は声だけの連絡ではわかりづらい。文書や図等での共通理解を図っていくべきと考える。先を見通した動きができるように仕事の「見える化」に取り組んでいきたい。	A	

4 本年度のまとめ ・ 次年度の取組	
○保護者アンケートの学校に関しては、どの項目も80%以上(教育相談のみ79.3%)で、学校の取り組みを認めてもらっているといえる。特に、「教育目標」「学力向上、授業改善」「健康・体づくり・食育」は90%以上の方に取り組みを認めてもらい、評価が高い。全体として86.7%の方が取り組みを認めている。	
○保護者アンケートの家庭に関しては、「ICT利活用教育」の項目以外は80%以上(教育目標のみ79.3%)の方が取り組んでいる。特に、「学力向上、授業力改善」「道徳教育・心の教育」「教育相談」「健康・体づくり・食育」への関心が大きく、90%を超えている。全体的には83.3%で関心の高さを感ずる。ただし、「ICT利活用教育」に対しては44.8%で、関心の低さを感ずる。	
○児童アンケートにおいては、全項目、3.1以上の評価になっている。良い評価を得ていることがわかる。特に、「学力向上・授業改善」は、「わかる」・「ややわかる」をあわせると、94.4%で、昨年度より0.4ポイント向上している。また、「道徳教育・心の教育」は、「あてはまる」・「ややあてはまる」をあわせると、91.7%で、日常の児童観察・コミュニケーション並びにその都度その都度、迅速で丁寧な対応をこれからも重要視していきたい。「ICT利活用教育」は、評価3.56と非常に高く、分かりやすい授業につながっていることが分かる。しかし、「教育相談」では多くの児童が「心配なことや困っていることがある」と答えている児童が27.2%いる。「いじめ早期発見・対応」で「いじめたり、いじめられたりした」と感じている児童が21.2%いる。日常の丁寧なコミュニケーションを大切に、安心して生活できるように努め、必要に応じて教育相談などにつなげていったり、日頃の人権教育・道徳・個人面談等を繰り返して、深刻ないじめになる前に解決を図る必要がある。	

●は共通評価項目、○は独自評価項目